

I 研究の概要

1. 研究の背景と目的

特別支援教育、とりわけ肢体不自由教育においては、これまでも児童生徒の多様な実態に応じてのAT（Assistive Technology：アシスティブ・テクノロジー 以下「AT」という）及びICT（Information and Communication Technology：情報通信技術 以下「ICT」という）の活用はきわめて重要なものとしてとらえられてきた。しかしながら、特別支援学校（肢体不自由）におけるAT及びICTの活用では、専門性を有する特定の教員の有無に依存していることも併せて指摘されており、組織的な取組によるいっそうの促進が求められている。さらに、今後においては、特別支援学校（肢体不自由）におけるAT及びICT活用の知見は、センター的機能が発揮される中で活かされることが望まれる。

こうした背景を受けて、本研究においては対象とするAT及びICTは以下の2つの観点で使用することを中心として想定した。

（1）主に対象とするAT及びICTを活用する場面

- ・「学習上の困難」を解消・改善するための活用を中心とする。
- ・具体的には、「読み、書き、計算」すること、「話す、聞く、見る」こと、「考えを整理したり、まとめたりする」ことなどの活動に伴う困難を解消・改善することを中心に考える。
- ・学習の基盤となるコミュニケーションをより円滑にできるためのAT及びICTも含む。

（2）ICTと関連したAT

- ・ATの中でも e-AT（electronic and information technology based Assistive Technology：電子情報通信技術をベースにした支援技術）とよばれるICTの役割を重視することとする。

そうした理由より、本研究においては標題にあるように「AT・ICT」と併記して示すこととした。

なお、（1）に挙げた「学習の場面」を重視するが、（2）については学校現場での活用の状況を検討する際には、「電子情報通信技術をベース」であることに限定はしない。つまり、ATにおいて、学習する上で必要な椅子や机、書見台、文具なども含む。また、ICTにおいて、「Information and Communication」の視点を重視しつつ、「Technology」に関しては、いわゆる「ローテク」（シンボル、サイン、ジェスチャ、文字盤 等々）も含めて考えていくこととした。

そこで、本研究では、以下のことを目的とした。

- （1）特別支援学校（肢体不自由）のAT・ICT活用についての現状と課題を整理し、またAT・ICTを活用したセンター的機能の現状を把握する。
- （2）特別支援学校（肢体不自由）におけるAT・ICT活用の専門性を高める組織的な取組について検討し、有効と思われる実践事例を提案する。

- (3) 小・中学校等に在籍する肢体不自由のある児童生徒へのA T・I C Tを活用した指導・支援のために、特別支援学校（肢体不自由）のセンター的機能が貢献できる可能性等について実践事例の検討を通して明らかにする。

2. 研究の方法

(1) 文献等による研究

- ・肢体不自由のある児童生徒へのA T・I C T活用に関する資料の収集及び整理・分析する。

(2) 特別支援学校（肢体不自由）への調査

- ・全国の特別支援学校（肢体不自由）を対象に質問紙調査により、在校児童生徒へのA T・I C T活用についての現状と課題に関する情報を収集し、整理・分析する。またA T・I C Tを活用したセンター的機能の現状を把握する。
- ・特別支援学校（肢体不自由）を訪問し、A T・I C T活用とセンター的機能に関する情報を収集し、整理・分析する。

(3) 特別支援学校（肢体不自由）の教員への調査

- ・研究協力機関である特別支援学校（肢体不自由）の教員を対象に質問紙調査より、自身のA T・I C T活用能力評価と研修ニーズに関する情報を収集し、整理・分析する。
- ・支援技術（A T）活用の自己評価マトリクス（試案）の試用をしてもらい、評価項目の妥当性を検討する資料とする。

(4) 特別支援学級への調査

- ・特別支援学級（肢体不自由）を訪問し、A T・I C T活用と特別支援学校のセンター的機能の活用に関する情報を収集し、整理・分析する。

(5) 専門家による協議

- ・「肢体不自由のある児童生徒のA T・I C T活用」及び「特別支援学校（肢体不自由）のセンター的機能」について協議する。

本研究では、特別支援学校（肢体不自由）のA T・I C T活用に関する検討を中心とし、特別支援学校のセンター的機能を活用した小・中学校での肢体不自由のある児童生徒へのA T・I C T活用の現状と課題を事例より検討することとした（図 I-2-1）。

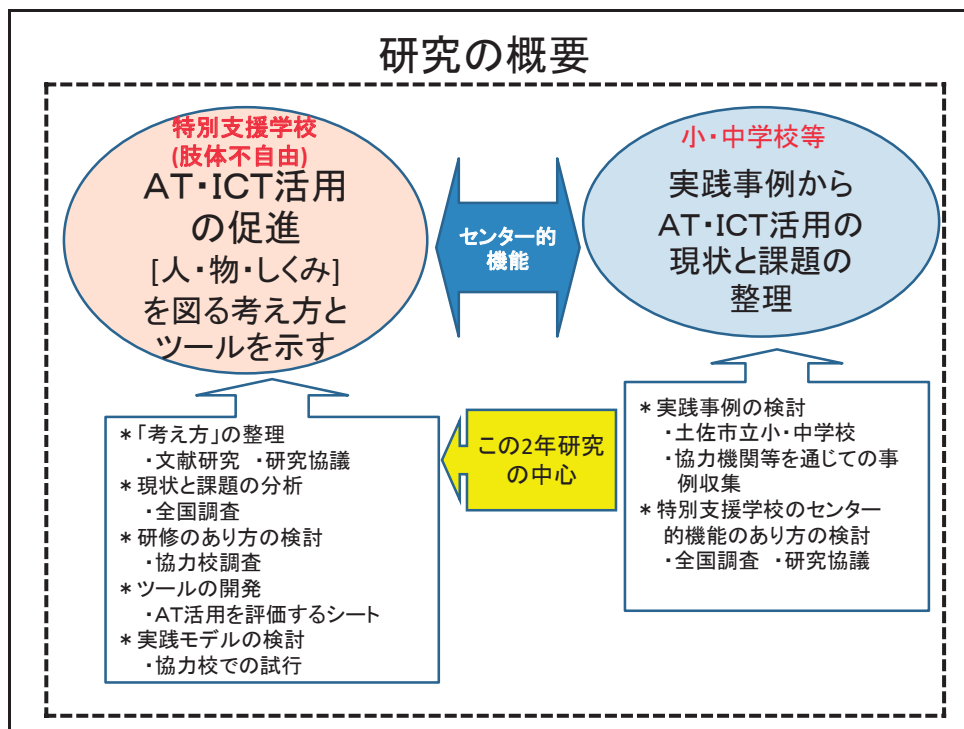


図 I -2-1 研究の概要

3. 研究活動（経過の概要）

（1）平成 24 年度

研究者による文献等による研究、調査データの分析と定例の協議（1回／1週・90分）を行い、加えて以下の取組を実施した。

① 第1回研究協議会（平成24年6月15日）

以下の内容について研究協力者と協議を行った。

- 1) 研究の趣旨及び概要について共通理解を図る。
- 2) 研究課題について協議する。

- ・肢体不自由のある児童生徒のAT・ICT活用の現状と課題について
- ・特別支援学校（肢体不自由）において、AT・ICT活用が促進されるために必要な学校としての組織的な取組について
- ・特別支援学校(肢体不自由)のセンター的機能の現状と課題

② 研究協力機関訪問

AT・ICT活用及びセンター的機能の取組について、実地調査による情報の収集を行った。

③ 特別支援学校（肢体不自由）教員への調査

質問紙を使って、2校、269名の教員に「教員のAT・ICT活用に関する調査」を実施した。

④ 特別支援学校（肢体不自由）への調査

全国特別支援学校（肢体不自由）316校を対象に「特別支援学校（肢体不自由）におけるAT（ICTを含む）の活用とセンター的機能に関する調査」を実施した。

⑤ 第2回研究協議会（平成24年11月2日）

以下の内容について研究協力者及び研究協力機関代表者と協議を行った。

- 1) 特別支援学校（肢体不自由）におけるAT・ICT活用の現状と課題について
 - ・全国特別支援学校（肢体不自由）を対象に実施した調査結果
 - ・研究協力機関（特別支援学校）における取組の紹介
- 2) AT・ICT活用が促進するための組織的な取組について
 - ・特別支援学校（肢体不自由）の教員を対象に実施した調査結果
 - ・AT・ICT活用が促進されるための校内運営や研修プログラム
- 3) 特別支援学校（肢体不自由）のセンター的機能が発揮されるために必要な取組について
 - ・研究協力機関（特別支援学校）における取組の紹介
 - ・研究協力機関（小・中学校）における実践事例の紹介

⑥ 3回研究協議会（平成25年2月14日）

以下の内容について研究協力者及び研究協力機関代表者と協議を行った。

- 1) 研究協力機関（特別支援学校）における研修企画の現状と課題について
 - ・AT・ICT活用を促進するための研修モデル
 - ・支援技術（AT）活用の自己評価マトリクス
- 2) 特別支援学校（肢体不自由）のセンター的機能が発揮されるために必要な取組について
 - ・全国特別支援学校（肢体不自由）を対象に実施した調査結果
 - ・特別支援学校の小・中学校等への相談・支援の実践事例

⑦ 日本特殊教育学会・第50回大会にて自主シンポジウムを開催

「特別支援教育におけるICT及びアシスティブ・テクノロジーの活用(2)」を企画・実施した。

⑧ ATACカンファレンス2012にてポスター発表

「特別支援学校(肢体不自由)におけるAT（ICTを含む）の活用の現状－全国特別支援学校（肢体不自由）調査の結果から－」について発表した。

（2）平成25年度

研究者による文献等による研究、調査データの分析と定例の協議（1回／1週・90分）を行い、加えて以下の取組を実施した。

① 研究協力機関訪問

各機関の取組について分析し、工夫点と課題を明確にするための検討を各機関の担当者で行った。

② 第4回研究協議会（平成25年9月27日）

以下の内容について研究協力者及び研究協力機関代表者と協議を行った。

1) 研究の進捗状況の確認と今後の課題について

2) 実践事例のまとめ方について

③ 特別支援学校（肢体不自由）教員への調査

質問紙を使って、1校、82名の教員に「教員のAT・ICT活用に関する調査(二次)」を実施した。

④ 「支援技術（AT）活用の自己評価マトリクスー特別支援学校(肢体不自由)版（試案）」の作成

研究協力機関ならびに研究力者の勤務する特別支援学校にて、「支援技術（AT）活用の自己評価マトリクスー特別支援学校(肢体不自由)版（試案）」について、モニタリングをした。

⑤ 日本特殊教育学会・第51回大会にてポスター発表と自主シンポジウムの開催

「特別支援学校(肢体不自由)における教員のAT(ICTを含む)の活用能力の自己評価及び研修ニーズに関する検討ー静岡県立中央特別支援学校における調査結果を通してー」についてポスター発表した。また、自主シンポジウム「特別支援教育におけるICT及びアシスティブ・テクノロジーの活用(3)」を企画・実施した。

⑥ 日本教育情報学会にて発表

「肢体不自由特別支援学校におけるタブレット端末活用に関する検討」について発表した。

(長沼俊夫 金森克浩 徳永亜希雄 齊藤由美子)